

# ビデオギャラリー SCAN と 1980 年代のビデオ・アート ——自作《アリアトリック・デシネ》の回想を添えて

佐々木 成明

## ・「ビデオひろば」から「ビデオギャラリーSCAN」へ

70年代の自由主義と反戦運動のムーブメントは、アートとメディアの新たな活動を促した。そのような時代に、山口勝弘、松本俊夫、中谷芙二子、かわなかのぶひろ、小林はくどう、萩原朔美が参加した実験的映像グループ「ビデオひろば」が1972年に日本で結成された。彼らはビデオを新たな可能性を秘めたメディアと捉え、市民運動を支援するなど、既存のマスメディア概念を越えた新たな映像表現とコミュニケーションのかたちを模索した。

ビデオひろばの先駆的アプローチから約10年を経た1980年に東京原宿で中谷芙二子によって設立されたのがビデオ・アート専門の「ビデオギャラリーSCAN」であった。SCANは「ビデオ・テレビジョン・フェスティバル」(1987年、1989年、1992年、青山スパイラル)などの開催を通して国内外のビデオ・アートの動向を伝える活動を精力的に行った。アーティストの個展や、年2回の新作公募展を開催したSCANは国内アーティストの輩出と交流の場としても機能した。

ビデオの走査線を表し、物事を探査し入念に見ることを意味するSCANという名称はビデオ・アーティストのビル・ヴィオラによる命名である。

SCAN以外の動向に触れておくと、80年代のビデオ・アートに関する特質すべき展覧会としては「ナムジュン・パイク展—ビデオ・アートを中心に」(1984年、東京都美術館)、「ビデオ・カクテル」(1984年、駒井画廊、1986年、原美術館)、「ふくい国際ビデオビエンナーレ」(1985年から99年まで8回開催、福井県立美術館)、グループ・アール・ジュニによる「ハイ・テクノロジー・アート展」(1986年、池袋サンシャインセンター)、「第4回現代芸術祭—映像の今日」(1989年、富山県立近代美術館)、そして「ブライアン・イーノ—ビデオアートと環境音楽の世界」(1983年、ラフォーレミュージアム赤坂)と、後述する筑波博でのラジカルTVと坂本龍一によるライブ《TV WAR》(1985年)、さらに世界規模のビデオ・マガジン「INFERMENTAL 8」(1988年)の東京での制作などが挙げられる。

## ・活動の場を越境していった80年代のビデオ・アーティストたち

SCANに集う80年代の日本のビデオ・アーティストたちの多くは、空間・時間・記録をテーマとした日本独自というべき感性を窺わせていた。東洋思想や日本の俳句などに多分な

興味を示したビル・ヴィオラやゲリー・ヒルたちの作品にインスパイアされつつ、独自の眼差しで、目の前にある世界をビデオ記録で捉え表そうとした。黒塚直子、斎藤信、島野義孝らの作品がこれに該当するであろう。その一方で、デジタル以前というべきこの時代に斬新的と捉えられた画像を湾曲させるなどのエフェクトや、グラフィカルな映像加工の技術を駆使して作品を制作する篠原康雄や大山麻里のような作家もいた。

これらは80年代の日本のビデオ・アート作品の特徴であって、先行する70年代のビデオひろば世代が抱えていたテーマ性とは異なる動向であった。

80年代は家庭用ビデオの普及が進み、デジタルという言葉よりもA&V(オーディオ&ヴィジュアル)で語られるのが一般的であった。この新しい映像メディアの発展と、その潮流の一端をビデオ・アーティストたちが担っていたといっているだろう。

美術館の展示でビデオの使用がようやく始まった時代であったが、他の分野でもアーティストたちの活躍が数多く散見された。

邱世源たちによるスキヤニング・プールは、レーベルとしてレコードではなくビデオで音楽作品をリリースしていた。タイル・コーポレーションの川口真央や中野裕之たちはテレビ番組やミュージック・クリップなどを手がけた。六本木インクスティックなどで開催された「フジAVライブ」(1986~1988年)では、多くのメディア・アーティストたちが音楽のアーティストとのコラボレーションを行った。これらの例のようにビデオ・アートの作家たちが、日本の映像文化を担う人材として様々な分野で頭角をみせていた。

ビデオの映像は、80年代を通して新しいエンターテイメントとして発展したが、その代表格として紹介できるのがミュージック・ビデオであった。1981年に開局されたアメリカのケーブルテレビ局MTVが最初に放映したミュージック・ビデオはバグダットの「ラジオ・スターの悲劇」(原題Video Killed the Radio Star)だ。ダンス・パフォーマンスが話題となったマイケル・ジャクソンの「スリラー」は1982年の作品だった。YouTubeの再生回数が2020年に10億回を突破したa-haの「Take On Me」が制作されたのは1986年であった。

1969年から制作が始められた「パイク=アベ・ビデオ・シ

ンセサイザー」から 15年後の1984年に登場したフェアライト CVI (Computer Video Instrument) は、スタジオで使用されていた日本電気株式会社 (NEC) の DVE SYSTEM10や、Abekas社のA-62などの高価なデジタル・ビデオ・エフェクト機器の機能を、シンセサイザーのように操作できるデバイスであった。これらのビデオ・エフェクターを使用したビデオ・プレーは現在のVJカルチャーの萌芽といえよう。

ブライアン・イーノの個展を経て一般にも知られるようになった「環境ビデオ」や「ビデオ・ドラッグ」と称されていたような作品の普及や、筑波万博（国際科学技術博覧会）でソニーの巨大なモニター「ジャンボトロン」を使用したラジカルTVと坂本龍一によるライブ《TV WAR》も、この時代の潮流の一つとして挙げられる。

いわゆるバブル景気といわれた80年代のビデオ・アートは、70年代と異なり、祝祭的なものや、エンターテインメント的な要素が強かった。

#### ・上映作品《アリアトリック・デシネ》について

第21回中之島映像劇場「美術館と映像—ビデオアートの上映・保存—」の上映に加えて頂いた自作《アリアトリック・デシネ》(1988年)にも当時の状況とその影響がうかがえる。

この作品がいくつかのショート・ムービーによるオムニバス形式で連なっているのは、1984年にパリとニューヨークを

繋いで開催されたナムジュン・パイクによるサテライト・アート《グッド・モーニング・ミスター・オーウェル》と同じく、小作品で構成されたテレビプログラムの様なものを想定していたからだ(ジョージ・オーウェルの小説『1984年』(1949年)で予言されていたディストピア世界をアイロニカルに捉えたこのサテライトのプログラムにはジョン・ケージ、シンガーのサッフォー、ヨーゼフ・ボイス、マース・カニングハムといった時代のスターたちが出演していた)。

8つのビデオ・モニターの映像がシンクロして再生されるインスタレーション形式というのは、この時代に多くのアーティストが行っていたイントレ型モニターを積み上げるビデオ・マトリックスの形式である。(使用していたモニターはヒビノ株式会社から払い下げして頂いたイベント用のモニターであった)

数つかの楽曲で構成されるレコードアルバムのように小作品から成り立つプログラムを構想していた。各作品はどれもが時間や空間についての考察や実験的試みで、それぞれが言語を介さない映像詩として成立するように制作している。

美大のアトリエで行われるデッサンはモチーフを祀る宗教的祭礼やメディテーション行為のようであり、モチーフを取り囲む画学生たちのデッサンを集めてコマドリすると回転するアニメーションになる。カフェの空間では人々がみな同じように語り同じような動きをしているが、その情景はミニマルな



《アリアトリック・デシネ》

美しさをもつ。通行する電車の先端と終わりを編集で繋げてしまうと電車をもつ暴力的な移動が強化される… このような断片的イメージを延々と束ねていく。

表現手法としては、この時代に自分が傾倒していた二次元の錯視—トロンブルイユ（だまし絵）の表現や、映像の倍速再生、合成の技法などが使われている。

タイトルの「アリアトリック・デシネ」とは、オペラなどで歌われる旋律的な独唱曲を意味するイタリア語の「アリア」とフランス語で素描や線で描くことを表す「デシネー」を連ねた造語で、ステファヌ・マラルメの詩作と書籍編集の手法からアイデアを得ている。

詩（イメージ）は言葉や図像を連ねて貼り合わせることで生まれるが、そのイメージは投げられるサイコロ（骰子）の目のように幾通りもの組みあわせが可能である。マルチモニターで複数の映像が同時に再生されるこの作品では、バラレルなイメージ（動画）が時空間のプリコラージュとして、8台のモニター上でバラバラに再生されているのだが、どのような組み合わせで見たかによって印象が異なる。鑑賞の偶然性が作品の重要な要素のひとつになっているのだ。

マラルメが提唱し、自ら実践した、偶然の持続や文字同士の関係性を意識したレイアウトの書物は、現代音楽の「図形楽譜」と同じく、当時の私にとって美しい偶然が宿る魅力的なものであった。

映像メディアは、目眩（イリンクス）という体感的な喜びとともに、論理的に意味や思想を紡ぎ出す可能性にみちているという思考から、私はこの作品を1988年に制作した。

#### ※上映に当たって

この作品は自分の周りに散らばっていた 80 年代の映像文化を、統一的に捉えようとする試みとして制作した大学院の修了制作作品であった。出演して頂いた「パパ・タラフマラ」のパフォーマーのみなさんやアルフレッド・バーンバウムさん、30年ぶりの上映に当たって、制作に協力頂いた方々、そして素晴らしい楽曲の使用を許諾して下さった当時私の周りにいた才能あふれる音楽家のみなさんに、この場を借りて改めてお礼を述べさせていただきます。「ありがとうございました！」

ささき なるあき／映像作家

第21回中之島映像劇場  
美術館と映像—ビデオアートの上映・保存— 配布資料をウェブに再掲 発行:国立国際美術館  
資料発行日:2021年9月18日